＞Die Wahlverwandtschaften＜ の形象構造（Ⅰ）

―― 偶然形象について ――

(Das Zufällige-Bild in Goethes Wahlverwandtschaften)

後　潟　雅　生

＞Die Wahlverwandtschaften＜ は，ゲーテの作品の中でも，近年最も問題にされている作品の一つである．この小説は解釈の困難な作品である．筋はきわめて明解であるにもかかわらず，作者は，この小説において意図しているものが何であるのか，読者には決して直截には示してくれない．むしろ象徴的な表現によって故意にわかりにくいものにしようとしているとさえ思えるのである．したがって，その解釈は著しく困難である．それ以前の作品には，この小説ほど著者の作品の意図を計りかねるようなものは存していない．ところで，この小説にはゲーテの晩年時代の始まりをはっきり刻印しているものが表わされていると考えられるのであるが，それはどのようなものであろうか．また，近年におけるこの小説に対する関心は，この小説の何に向けられているのであろうか．

第二次世界大戦を境目に，ゲーテ研究の主要な関心が，それまでの＞Faust＜や＞Willhelm Meisters Lehrjahre＜そして主として Sturm und Drang 時代と古典主義時代のゲーテから，＞Die Wahlverwandtschaften＜，＞West-östlicher Divan＜，＞Wilhelm Meisters Wanderjahre＜等を中心とする晩年時代の文学と思想に移行していることは，大戦前とそれ以後の文献目録を比較するだけでもきわめて明瞭に認めることができる．殊に大戦後の十数年間には，次々と注目すべき＞Die Wahlverwandtschaften＜研究が現われ，あるいはそれ以前の＞Die Wahlverwandtschaften＜論の再検討がなされ，この作品のもつ重要性が認識され，その再評価を促してきた．そしてこの作品とテーマの上で深い関連性を有する，同じく晩年時代の大作である＞West-östlicher Divan＜の解明に多くの研究者の関心が次第に移ってきているような観があるとは言え，ゲーテの晩年時代に対する関心という点では，現在も引続いて同じであると言えるであろう．

ゲーテ研究におけるこのような動きは，従来のゲーテ解釈を覆すような内容をもつ新たな資料が戦後になって特に発見された訳でもないのに，きわめて大きな流れとなって続いている．勿論，ゲーテの膨大な著作や資料を考えるならば，これまでは技術的に晩年時代のものまでには及び得なかったという事情も考えられないではない．むしろそれよりも，この大戦を経験し，従来の人間と世界のあり方に深刻な懐疑を抱いた人々が，晩年時代のゲーテの文学と思想の中に，新たな模索の方向と新たな人間像の形成のための立脚点を示唆するものを予感したからではなかろうか．したがって，この観点に立てば，戦後における多くの研究者のゲーテの晩年時代に対する着目は，現代人の内的必然性に支えられていると言える．＞Die Wahlverwandtschaften＜の世

界における合理的理性に対する深いイロニイや合理的理性による説明を越えた存在の形象，そして ＞ West-östlicher Divan ＜ における英知の世界は，近代ヨーロッパ人が自己の基盤としてきた合理的理性への信頼を失い，改めて人間と世界のあり方そのものの根本的な再省察と再構築を志向しようとする者に，強く訴えかけるものを蔵していると考えられる．

I

ゲーテの晩年時代は友人 Schiller の死と共に始まるとするのが定説である．そしてさらに，例えば，ゲーテの晩年時代の解明に重要な役割を果したと考えられる Paul Hankamer はその主著 ＞ Spiel der Mächte ＜ において，ゲーテの古典主義時代から晩年時代への移行を明瞭に示している時期として，言はば晩年時代初期として，Schiler が死んだ 1805 年から ＞ Farbenlehre I ＞ 成立の 1810 年までの 5 年間を考え，この間に書かれた文学作品やその他の著作とこの間のゲーテの体験を一つの緊密な有機的関連を有しているものとして詳細に論証している．ただこの区分について言えば，晩年時代初期を1805年から ＞ West-östlicher Divan ＜ 成立の1819年までとする異論も十分考えられるが，本論文とは直接には関係していないから，これ以上言及する必要は無いだろう．この 5 年間におけるゲーテの文学作品に関して言えば，Paul Hankamer は＞Sonette＜ (1807) と ＞ Pandorens Wiederkunft ＜(1808) と ＞ Die Wahlverwandtschaften ＜ (1809) の関連性を考察し，＞ Die Wahlverwandtschaften ＜ において，ゲーテの古典主義時代の文学の世界から明確に区別される晩年時代の世界が確立されたと考えている．＞ Die Wahlverwandtschaften ＜ がゲーテの晩年時代への移行を十分に特徴づけているものであることは，ゲーテの文学における人物形象史の観点からだけでも知ることができる．ゲーテは生涯を通じてその文学作品において殆ど類型的とも思える人物を描いているのであるが，この小説においてもそれが認められる．この小説に登場している四人の主要人物群の一人 Eduard は，その原型をすでに青年期の ＞ Die Leiden des jungen Werther ＜ の Werther に見ることができる．さらに，この原型を色濃く留めている人物として ＞ Torquato Tasso ＜ における Tasso がある．これら三人の人物を並べてみるとき，我々は重要な事実に気づくのである．＞ Die Leiden des jungen Werther ＜ は 1775 年に成立したゲーテの Sturm und Drang 時代を代表する作品であり，＞ Torquato Tasso ＜ は 1789 年に成立した，＞ Iehigenie auf Tauris ＜ と並ぶゲーテの古典主義時代の代表作である．そして ＞ Die Wahlverwandtschaften ＜ は，古典主義時代からの離脱をはっきり示している晩年時代の最初の作品となっている．Werther-Tasso-Eduard の三人はいずれも時間的には大きな隔たりのある時期に書かれているにもかかわらず，いずれもゲーテ自身が投影され，同一線上にあるデモーニッシュなゲーテ的存在である．いはばゲーテの分身となって各作品に登場している．ここで注目したいのは，これら三人の人物が同じくデモーニッシュなゲーテ的存在としての原型を保っているにもかかわらず，各作品におけるこれらの人物の形象化には著しい差異を認め得ることである．そうして，この差異にゲーテの思想の変遷を見ることが可能であろう．

＞ Die Leiden des jungen Werther ＜ においてはゲーテは自己を Werther に同一化してい

る．Werther はデモーニッシュな自巳の情念を絶対的なものと見なし，Lotte への思いが現実の世界にあっては許されないことを知ったとき，その情念を断念しようとは考えず，自巳を死に致らしめることによって全うしている．この小説では，Werther の死は単なる逃避ではなく，彼は絶対的なものとしての情念の殉教者として形象化されている．Werther は自巳の存在のあり方には何の疑念も抱いてはいない．ゲーテは再び ＞Torquato Tasso＜ において Werther 的人物として Ta so を登場させている．詩人 Tasso も Wether 的人物であるけれども，もはや自己のデモーニッシュな存在のあり方をそのまま絶対化することはできなくなっている．彼は自分とは全く対極的な人物である現実主義者 Antonio との出会いによって，社会的存在としての自己に目覚め，次第に彼を受入れ，自己と他者との調和を求めている．この調和によって Werther 的な存在は昇化されると古典主義時代のゲーテは考えているようである．この調和はいはゆる「諦念」(Resignation) の思想によってもたらされている．より一般化して言えば，理性に自己を服せしめることによって秩序を求めるのであり，ここにゲーテの理性への信頼を読み取れるであろう．しかしながら Werther を駆りたてたデモーニッシュなものは，ゲーテの古典主義時代の「諦念」によって解決できるのであろうか．＞Die Wahlverwandtschaften＜ にあっては再び一転して Werther の再現として Eduard が描かれている．この小説では Werther 的存在が Eduard を通して再考察されていると言える．Eeuard はもはや Werther のように肯定的に形象化されることもなく，また Ta so のように調和を得ることもできない．Eduard は，この小説においては，批判の対象にされているのである．彼は合理的理性による理解を越えたデモーニッシュなものによって飜弄される存在として形象化され，したがって「諦念」による調和もありえない．自巳の分身としての Eduard を厳しい批判の対象にしなければならなかった当時のゲーテには，深刻な危機意識があったことが，彼の書簡等によっても裏づけられている．この小説を書かねばならなかった当時のゲーテの危機的な状況については，すでに数多くの研究者によって，伝記的観点から解明されている．Paul Hankamer は前述の著書において，ミンナ体験，ナポレオンとの邂逅，当時のドイツの政治的社会的不安からそれを解明している．いずれにしてもこれらの外的状況とそれに対応するゲーテ自身の内的危機によってこの作品が成立したことは確かであろう．そしてゲーテのこの危機意識とそれによって生まれた＜Die Wahlverwandtschaften＜ が，現代の我々の危機意識と共通するものを有していることは十分考えられるであろう．

これまで Werther-Tasso-Eduard の三人の人物の形象における差異に注意して，ゲーテの思想の変化を概観したのであるが，それは筆者が意図しているゲーテの晩年時代初期の作品 ＞Die Wahlverwandtschaften＜ の分析を進めるにあたって，ゲーテにおいてこの作品が占めている位置を見ておくのに好都合だったからである．したがって，これら三人の人物の関連性と差異を知ることは，ゲーテの思想の変容のプロセスをとらえるという点で，きわめて示唆に富んでいるのであるが，Eduard の形象だけを分析してみても，それだけではこの小説のもつ意味を十分に知り得ないことは言うまでもない．作品全体の意味という観点に立てば，Eduard と他の人物及び作品世界との関係のあり方が考察されねばならない．

II

> In dem Roman ist kein Strich erhalten, der nicht erlebt, aber kein Strich so, wie er erlebt worden ist. <

これはゲーテが1830年2月17日に Eckermann に語った，ゲーテ自身による > Die Wahlverwandtschaften < についてのきわめて暗示的な説明である．「この小説には一行たりとも体験されていないものはない．しかし一行たりとも体験されたままに書かれているものもない．」とは，一体何を意味しているのであろうか．よく知られているゲーテのこの言明は，この小説と彼の体験の関連づけの際しばしば引用され解釈されるのであるが，ここでは体験の研究，即ち伝記的研究がこの小説の解明には直接的には結びつきえないということ，したがってその解釈には困難が伴うことをゲーテ自身がほのめかしているわけである．それでは，このようなゲーテの意図は，どのような小説形式によって実現されているのであろうか．

> Die Wahlverwandtschaften < はゲーテの作品の中でもその形式の点できわめて特異な形態を取っている．このことは，ゲーテが1825年7月6日に Eckermann に語った次のことばからも知り得よう．

> Das einzige Produkt von größerem Umfang, wo mir bewußt bin, nach Darstellung einer durchgreifenden Idee gearbeitet haben, wären etwa meine "Wahlverwandtscfaften". Der Roman ist dadurch für den Verstand faßlich geworden; aber ich will nicht sagen, daß er dadurch besser geworden wäre. <

eine durchgreifende Idee が，Schiller との論争でも明らかなように抽象的な理念ではなく，具象的なものである，とゲーテ的な意味で理解するとしても，この小説全体がある理念のもとに構想され統一されていることは，この小説自体が示している．この小説における理念とは，親和力の現象であると理解してよいだろう．

この作品は，小説形式としては前述の理念のもとに計算しつくされたものであり，この意味で全く技巧的な作品である．親和力という化学現象が小説の発端（I・4）において作中の人物を通じて説明がなされ，四人の主要人物がその化学反応と同じく結合離散するとするアレゴーリッシュな展開をもって小説が動き出すという，全く大胆な技巧的な構成．それら主要人物群に対して配置される数多くの人物群．小説の筋とは直接関連を有していない，冗長とも言える長々とした庭園や風景についての微細にわたる描写．偶然的事象の形式をとって現われ，それが必然性を予示するという Zeichen としての様々な事象．Ottilie に認められる聖女化．それらの形象は，この小説に神話的な性格を付与している．

このように余りにも技巧的な構造を有しているにもかかわらず，この小説は全体としては恐るべき心理的リアリティを具えている．我々は等しくこのリアリティを感得できるのであるが，しかしこの小説は，著者の明瞭な意図といったものを読者には決して伝えてくれないのである．そのために我々は当惑してしまうのであって，これまで多様な解釈が提出されてきた原因もここにあるのであろう．この解釈上の困難と多様性は，この作品の構造そのものに起因していると考えら

れる．Korf がこの小説を規定しているように > als deren Thema wir ganz allgemein den Konflikt zwischen Ordnung und Leidenschaft, allgemeinem Gesetz und persönlicher Neigung bezeichnen können. <[1] と受止めるならば，それはこの小説の平板な単純化であって，この小説のもつ意味を見失うことになりはしないだろうか．何よりもこの作品自体がそのような単純化を拒否している．少なくともそのような構造を有していると言えるであろう．

この作品に登場している人物は，それぞれ明確な存在様式をもつ典型，或は類型として描かれ，一つの類型は他の類型が対置されることによって，不安定なものと化し，その類型そのもののあり方が問われ，問題があることが判明してくるのである．この作品はこのように，イローニッシュな構造をもっている．そしてそれらの人物は，Werther や Tasso の場合とは異なり，誰一人として著者が肯定し得る存在にはなりえていない．ゲーテは，あたかも化学者が化学反応のプロセスを見るかのように，事態を深く見極めようとしている．ゲーテの分身であると考えられる Eduard でさえ，冷刻なまでの観察の対象にされている．それは Eduard に限ったことではない．人物と人物の関係のあり方を通じて，それまで確固とした存在のあり方を有していたにもかかわらず，揺らぎ始め，そのあり方が問われてくるのである．だからと言って，それらの人物のあり方が完全に否定されてしまうわけでもない．この作品は，このようにイローニッシュな批判を通じて展開している．

ところで，あの「運命的な夜」(I・11) によって生まれた Eduard と Charlotte の子供が Ottile の過失によって溺死したとき，四人の主要人物はそれぞれ自已の存在のあり方に対応していると考えられる反応を示している．Eduard はこの事件を吉兆として受止めている．そのことについてはこう記されている．

> Er wußte bereits von dem Unglück, und auch er, anstatt das arme Gesbhöpf zu bedauern, sah diesen Fall, ohne sichs ganz gestehen zu wollen, als eine Fügung an, wodurch jedes Hindernis an seinem Glück auf einmal beseitigt wäre. < (2)

彼はこの偶然の事故を，何の躊躇も無く，自已のあり方の正当性を示す「摂理」(Fügung) としての Zeichen として理解しているのである．

他方 Charlotte は次のように反応している．

> Ich willige in die Scheidung. Ich hätte mich früher dazu entschließen sollen; durch mein Zaudern, mein Widerstreben habe ich das Kind getötet. Es sind gewisse Dinge, die sich das Schicksal hartnäckig vornimmt. Vergebens, daß Vernunft und Tugend, Pflicht und alles Heilige sich ihm in dem Weg stellen: es soll etwas geschehen, was ihm recht ist, was uns nicht recht scheint; und so greift es zuletzt durch, wir mögen uns gebärden, wie wir wollen. (3)

彼女は子供の死を，人間とは全く関係をもたない外的な力としての運命の仕業であるとみなし，運命に対してはどんなに正しいと思えることでも人間は無力であると言い，Hauptmann を通じて離婚に同意している．この事件は，彼女には人間の存在のあり方を本質的に考え直す契機にはなり得ないのであり，したがってデモーニッシュなものと人間の関係については洞察しえない．

彼女は，それまでのそしてその後も自分の考え方を変更する必要を全く認めていない．彼女は自分の秩序の感覚，換言すれば，自己の理性のあり方にはいささかの疑念も抱かないのである．作者は彼女の存在のあり方について直接には批判的なことばは全く述べていないけれども，彼女の理性がこの小説世界においていかに無力であるかがさらけ出されてしまっている．Charlotte にとっては Eduard も Ottilie も認識の彼方にあると言える．

Ottilie は，子供の死を通じて，自分が置かれている状況を次のような悲痛なことばで捉えている．

> Ich bin aus meiner Bahn geschritten, ich habe meine Gesetze gebrochen, ich habe sogar das Gefühl derselben verloren, und nach einem schrecklichen Ereignis klärst du mich wieder über meinen Zustand auf, der jammervoller ist als der erste. < [4)]

彼女は，Charlotte のように人間の正しさや意志とは無関係に人間に襲いかかる全く外的な力としての運命ではなく，この事件を啓示として受け止めている．Ottilie にはこの偶然的事象が > Gesetz < を知る契機になりえている．即ち，このような形式を通じて自分が置かれている状況を洞察しているのである．ところで軍人 Hauptmann は，前述の三人とも異なり，子供の死に何らかの意味を見出だそうとはしていない．したがって，彼にとっては自分達が置かれている状況を根本的に考える契機にはなりえないのである．彼にはこの事件は何の意味も無い，単なる偶然そのものだったからである．

これら四人の主要人物にとってこの事件がそれ自身としては，Hauptmann の反応が示しているように，全くの偶然的事象にすぎないものであるように，あの「運命的な夜」によって生まれた子供の容貌もまたそれ自身としては偶然的事象である．子供の洗礼式のとき，Ottilie と Mittler は子供を見て愕然としている．Eduard と Chalotte の間に生まれたその子供の目は Ottilie のそれに，身体は Hauptmann のそれに酷似していたからである．この形象には，間接的にゲーテ自身の仮借無き批判を認め得るであろう．このように，ゲーテはこの小説において偶然的事象を無数に用いている．

III

> Die Wahlverwandtschaften < は神話的形式を用いたイローニッシュな構造をもつ象徴的な作品であると考えられるのであるが，その神話的形式を構成しているものの一つが，これまで論じてきた偶然形象である．

ゲーテがこの小説において従横に駆使している偶然形象は，作品世界において必然的な意味をおびた象徴的な Zeichen となって現われ，この小説世界を織りなしている無視し得ない糸になっている．この小説における，主な偶然形象を挙げるならば，次のようなものを指摘できるであろう．即ち，前述の子供の容貌（II・8），子供の水死（II・13），Ottilie と Eduard の偏頭痛（I・5），定礎式のときに慣習に従って投げられたグラスに刻まれているEとOの文字（I・9）等である．

これらの偶然形象は，例えば Charlotte の場合，理性による理解を越えたものの存在を象徴的に表わすことによって，彼女の理性に大きな限界が存していることを明らかにしてしまう．したがって，＞Die Wahlverwandtschaften＜の世界の現実に対しては彼女の理性が無力であることを自からさらけ出してしまうのである．さらに補足的につけ加えるならば，Charlotte は，子供の容貌に現われている Zeichen を例にとれば，この Zeichen に気づかないはずは無い．それにもかかわらず，彼女はそのことについては全くふれていない．またこの Zeichen に動揺した様子も無い．繰返し述べるならば，この Zeichen は彼女の存在のあり方に対して本質的な考察を促す契機にはなりえないのであって，またその必要は彼女には無い．この事実は彼女の理性のあり方に問題があるのを計らずも表わしてしまっている．

このように偶然的事象が難解な文学的形式として用いられているために，しばしばこの作品が余りにも技巧的であり，作品の真意が不必要に隠されているような観を与える結果になっている．

ゲーテがこの小説で偶然形象をこのように用いることができたのは，ゲーテ自身に偶然的事象に対する並々ならぬ関心と考察が存したために違いないからであろう．このことを知るために，試みに一つの便宜的な方法として，Goethes Werke, Hamburger Ausgabe の Sachregister で Zufall ないし zufällig の語を調べてみると，一つの興味深い事実を見出だすのである．これに従えば，この語は＞Iphigenie aur Tauris＜，＞Torquato Tasso＜，＞Die natürliche Tochter＜，＞Wilhelm Meisters Lehrjahre＜等において始めて用いられている．これらの作品はいずれもゲーテの古典主義時代に成立したものであり，このことはゲーテの古典主義時代から晩年時代への移行過程を明らかにする上で一つの手掛りになるであろう．さらにつけ加えるならば，晩年時代の作品に現われるこの語の使用頻度は古典主義時代のそれをはるかに上まわっている．言うまでもなく，Zufall ないし zufällig の語がどのような意味で用いられているのか，またこの語に対応するゲーテの思想がどのようなものであるのか，分析が必要とされるけれども，ゲーテの晩年時代の思想の形成を知るうえできわめて示唆に富んだ事実であると言えよう．

ゲーテ自身は偶然的事象をどのように考え，位置づけていたのであろうか．彼は＞Wilhelm Meisters Lehrjahre＜で理性と偶然の関係について Wilhelm に次のように述べさせている．

> ＞Das Gewebe dieser Welt ist aus Notwendigkeit und Zufall gebildet; die Vernunft des Menschen stellt sich zwischen beide und weiß sie zu beherrschen; sie behandelt das Notwendige als den Grund ihres Daseins; das Zufällige weiß sie zu lenken, zu leiten und zu nutzen, und nur, indem sie fest und unerschütterlich steht, verdient der Mensch ein Gott der Erde genannt zu werden. Wehe dem, der sich von Jugend auf gewöhnt, in dem Notwendigen etwas Willkürliches finden zu wollen, der dem Zufälligen eine Art von Vernunft zuschreiben möchte, welcher zu folgen sogar eine Religion sei. Heißt das weiter, als seinem eigenen Verstande entsagen und seinen Neigungen unbedingten Raum geben? Wir bilden uns ein, fromm zu sein, indem wir ohne Überlegung hinschlendern, uns durch angenehme Zufälle determinieren lassen und endlich dem Resultate eines solchen schwankenden

Lebens den Namen einer göttlichen Führung geben, < [5]

必然と偶然より成りたっている世界にあって人間の理性はそれら両者の中間に位置している．そしてゲーテは，近代の合理主義思想や近代科学のようにこの世界の偶然を捨象して世界像を形成するのではなく，偶然をも包摂するような世界像を考えていたようである．しかもなおこの場合，人間はあくまで理性に依拠していなければならないとゲーテは考えている．そうすることによって人間は偶然を lenken, leiten, nutzen できるとする．同時に彼は偶然と必然の混同を厳しくいましめている．この考えを Charlotte に適用してみるならば，彼女は偶然を人間と無関係のものであると考えたために，偶然を lenken, leiten, nutzen できない．だから彼女は，当然のことながら，自已の合理的理性のあり方に対する反省の契機として偶然的事象を見ることができない．このことから，彼女はヨーロッパ近代の合理的理性を体現している人物であると言えるであろう．したがって，思想史的な観点から，彼女の形象にゲーテの近代ヨーロッパの合理主義思想に対する批判を見出だし得るであろう．他方 Eduard のように偶然的事象に Fügung を見ようとすることを，宗教的であるとしてゲーテは斥けていると考えられる．

偶然と必然の関係についてゲーテはさらに晩年時代の > Maximen und Reflexionen < において次のように述べている．

> Gesetz und Zufall greifen ineinander, der betrachtende Mensch aber kommt oft in den Fall, beide miteinander zu verweckseln, wie sich besonders an parteiischen Historikern bemerken läßt, die zwar meistens unbewußt, aber doch künstlich genug sich eben dieser Unsicherheit zu ihrem Vorteil bedienen. < [(6)]

ゲーテは古典主義時代から晩年時代に進むに従ってますます深く偶然的事象に着目していると考えられるのであるが，それでもなお，いわゆる運命論者ではない．ゲーテは，人間の理解の及ばないものが存在するとき，たとえそれが偶然的事象のように合理的説明を不可能にしているものであっても，それを無視してはならないと考える．ゲーテ的表現を用いるならば，そのような存在を認め，それをただ見るのみであって，その一線を人間は越えてはならないということになる．したがって，偶然の意味を形而上的に解釈することは危険であると考えるのである．もし偶然に神の意志というような形而上的な意味を見出だそうとするならば，それは宗教的次元に入るとゲーテは考える．

このようにゲーテは，偶然的事象を重要視しつつも，人間の最終的な拠り所としての理性の立場から離れてはいない．先に見たように，> Die Wahlverwandtschaften < における偶然形象の分析に従うならば，人間の偶然に対する関係は，人間と世界のあり方の考察を促す契機になり得るものであって，その判断は常に（ゲーテが考えている）理性に従ってなされなければならないが，しかもなお理性による解決を不可能にするものが存在するというのが，> Die Wahlverwandtschaften < においてゲーテが到達した思想であったであろう．あるいは，ゲーテが踏み入っていた世界は，英知の世界であったと言った方が妥当であろう．

この小論においては何の規定も加えずに理性ということばを用いてきたのであるが，ゲーテの

理性とは英知ということばに近いものであろう．理性の概念は常に時代的な制約を受けているのであるから，近代ヨーロッパの合理的理性の立場に立つ Charlotte も時代の子供であり，ゲーテの Charlotte 批判は彼の近代理性の批判であると言っても過言ではないだろう．

註

1. H. A. Korf: Geist der Goethezeit Bd. 2, S. 354.
2. Goethes Werke, Hamburger Ausgabe. Bd. 6, S. 461.
3. Bd. 6, a. a. o., S. 460.
4. Bd. 6, a. a. 0., S. 462.
5. Bd. 7, a. a. 0., S. 71.
6. Bd. 12, a. a. 0., S. 395.

主要参考文献

1. J. W. Goethe, Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche in 24 Bde. Zürich: Artemis Verlag 1949.
2. Goethes Werke in 14 Bde. Hamburg: Christian Wegner Verlag 1960.
3. H. A. Korf: Geist der Goethezeit Bd. 2. Leipzig: Koehler & Amelang 1964.
4. Friedrich Gundolf: Goethe. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1963.
5. Emil Staiger: Goethe Bd. 2. Zürich: Atlantis Verlag MCMLVII.
6. Paul Hankamer: Spiel der Mächte. Stuttgart: Metzlersche Verlagsbuchhandlung MCMLX.
7. H. J. Geerdts: Goethes Roman "Die Wahlverwandtschaften". Weimar: Arion Verlag 1958.